

第2章 原発事故被災地の現状—避難指示解除から新しい町造りへ—

1. 浪江町の概況

本報告書の冒頭において、浪江町の概況を検討する。我々は、町内視察ツアーに参加した後、町内で事業を再開したNPO法人、町役場などを訪問し、町民・役場職員の方々からお話しをお聞きした。以下には、それらに基づき、現在の浪江町の全体的状況を示そうとする。

(1) 浪江町の現状

2011年3月11日の東日本大震災の直後に発生した、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県双葉郡の市町村の多くの住民は避難を余儀なくされ、浪江町の場合、全町民約21,000人が避難を余儀なくされ、町民は全国に散り散りになった。

その後、避難指示が継続する中、浪江町内では、除染やインフラ復旧、生活基盤の再生が進められ、2017年3月31日には、一部地域の避難指示が解除され、居住が可能になり、町民の帰還が始まり(2022年12月末の居住人口は1,947人)、それと並行して復興に向けた様々な取組が進められている。特に、2022年9月には、帰還困難区域内の特定復興再生拠点区域での準備宿泊が開始されるなど立入規制が緩和され、2023年3月の避難指示解除を目指し、準備が進められている¹。

(2) 町内視察ツアー

本ツアーでは、二日目の9月26日、一般社団法人「まちづくりなみえ」の菅野孝明事務局次長に案内して頂き、棚塩産業団地、請戸漁港、大平山霊園を回った。棚塩産業団地は、国の指針と資金援助を受けて新たに造成された工業団地であり、広大な土地に水素工場など新しい工場・施設が建設され、稼動している様子を拝見した。脱原発を目指す上で不可欠な、新世代に向けたクリーンエネルギーの研究地として、発展することが期待される。

¹ すぐわかる浪江町（なみえまち）の現況」参照
(<https://www.town.namie.fukushima.jp/site/understand-namie/namie-factsheet.html>)。



(棚塩産業団地のソーラーパネルの様子。奥に見えるのが水素エネルギー開発フィールド。右は請戸漁港の写真)

請戸漁港を利用する漁業者は、現在、なお試験操業中であり、今後処理水の放出が決定してしまったことが本格操業開始への懸念されるところではあるが、かなり立派な漁港であった。

本ツアーと前日に浪江町を回った時の印象を総合すると、新たにホテルもオープンし、「道の駅」には県外からも多くの人々が訪れており、浪江町の現状からは「復興」の2文字が感じられた。また、イオンなどスーパーもあることから、生活上の不便も改善されていると思えた。一方で、9月27日に訪問した、同じ浪江町の津島地区は、津島地区が山間部であることを考慮しても、町全体が震災後の10年間で自然に飲み込まれつつあり、解体された家の解体完了の札が墓標のように立っており、住むには再除染が必要な状況ということで、とても「復興」を感じることはできなかった。

(3) 震災遺構浪江町立請戸小学校

(3-1)概要

町内ツアーとは別に、震災遺構である請戸小学校をも訪問した。東日本大震災による大地震・大津波に見舞われた請戸小学校は、生徒全員が無事避難することができた奇跡の学校としても知られている。倒壊を免れた校舎に刻まれた脅威と、全員避難することができた経験を伝えるため、2021年より震災遺構として一般公開されている。

(3-2)当日の記録



左の写真が、受付を入ってすぐの光景である。請戸小学校は1階部分が完全に津波の被害を受けた。また、右の写真のように、見学の順路には、被害を説明するパネル(左)の他に、時系列に沿って、震災当時、請戸小学校で何が合ったか(生徒と教師がどう逃げたか)を説明するパネル(右)がある。



これらの写真は、順路に入ってすぐの写真である。左の写真は、海側にある教室(3年生教室)で、津波の衝撃によって、天井・壁・床が破壊し尽くされている。右の写真は、山側の教室だが、津波の威力がさほど減衰せず、壁、窓などを破壊している。



上の2つの写真はいずれも海側の教室(左は2年生教室、右はおそらく1年生教室)。津波の威力がわかる。